

季刊 文科

70

編集委員
青木 健
伊藤氏賢
勝又 浩
佐藤洋二郎
津村節子
富岡幸一郎
中沢けい
松本 徹
松本 忠介

編集
吉村萬巻「感染した」
藤原智美「島津写真館」
植井早月「チヨコレート工場のある町」
寺本親平「擬宝珠」
茂木令子「剛子の家」
秋尾美里「私の友だち」
萩悦子「珠と刃」

〈生誕一五〇年記念〉
山房の漱石と夏目家の人々（聞き手
インタビュ 半藤末利子／伊藤氏賢
佐藤義雄 香日ゆら・中沢けい）
文科
津村節子 坂本忠雄 竹本忠雄



同人雑誌季評 谷村順一

嫌だった、嫌で嫌でたまらんかった。だから、ちつとも残念じゃないよ。だから、思い通りになったんだよ、ちつとも残念じゃあない」という九造の死に対して口にした佳枝の言葉。露出部への加虐を抑える九造とそれを受け入れる佳枝と新治。虐待の習慣化による家族の一体感。しかし、いつかは歯止めをかけなくてはいけない。

佳枝たちの選んだ方法とは、いったい何だったのだろうか。決して明かされることのない真相が、のどに刺さった小骨のように、違和感をのこし続ける。

DVを扱った作品をもうひとつ。高原あふち「オーバー・ザ・リバー」〔あるかいど〕大阪市の語り手は準とカナの夫婦。準の暴力によってカナと息子はやとは準と別居中。そして「オーバー・ザ・リバー」というタイトルが示すとおり、準は病でいままさに三途の川を渡る手前で、

た。

渡辺勝彦「小骨」〔R & W〕愛知県ではドメスティック・バイオレンス（DV）をめぐるある家族の姿が、児童相談所の相談員石川良子、そして刑事によって語られる。家庭とは、ある意味において外界から遮断された、閉鎖空間の究極的なかたちともいえる。家庭で何が起きているのか、それを他人が知ることは困難だし、まして家族が結託して隠蔽を試みればなおさらだ。本田九造の、妻佳枝、息子新治に対する暴力は苛烈を極める。学校からの通報を受けた良子は佳枝と新治に事情を訊くが、ふたりとも虐待を否定。そして事件が起きる。新治の失踪。九造の死。良子と刑事の聞き取りからみえてくる本田家の姿は、虐待があってもなおどこか幸福ですらある。もちろん暴力を肯定するわけではない。しかしそれでもなそう思えるのは、「あの人の自分：自分自身がもうずっと

の中にはさまざまな「家族」も描かれる。正木孝枝「春想」（「飛行船」徳島市）は、子離れできない母親とその家族の様子を描いた佳品。息子謙一が京都の大学に進学するため、徳島を離れることになったことがさみしくてたまらない直子。京都へ向かう高速バスでも、下宿先でもつれない謙一に思わず涙がこぼれる。直子自身もはやく子離れしなくてはと思っはいるのだが、しかし気持ちちはそう簡単に思うようにはならない。そうした母親の心情とともに、長女修子の部屋を訪れると、そこにはまだ修子から紹介されていない恋人の通介の姿があったり、直子を尾行する謎の男の正体が、直子を心配する夫教雄だったりと、エピソードに目新しさはないものの、直子と思う家族の姿が丁寧に描かれていることに感心したし、読後感がひとつの留保もなく、あたたかな気持ちに満たされたことにより好感を持つ

現世にのこした妻と息子に、自身の行いの愚かさや悔恨の情を痛々しいほどに語りかける。その語り口は思いやりにも、とても暴力を振るっていたなどとは信じがたい。その準の語りにもまた慈愛に溢れる。あらためて言う。決して暴力は許されるものではない。たとえどんな理由があったにしても。しかしそれでも暴力に至った家族の軌跡は様々だ。準は在日韓国人。「日本人の中で、常に被差別者で、異分子で、異邦人」として育ち、ときに自分では制御できない暴力を振るってしまう。その暴力は準を、そしてカナやはやとを苦しめる。暴力によって失われてしまった家庭を取りもどそうとする、死者と生者の交感はまだにも切なく、胸を強く締め付ける。

同誌、泉ふみお「サンタクローズ なんかいのもんか」もまた、失われた家族への痛切な思いを描く。主人

公健は定時制高校に通う高校生。中学のときに母親と妹が家を出て行ったからは父親との二人暮らし。そしてその生活は決して楽なものではない。二年近くのライトバンでの生活。万引きしたバンで腹を満たす。どうにか日高校に進学した健は、そこで健をあたたく見守る「貧相なおっさん校長」と出会い、同級生のユキに淡い恋心を抱く。ユキとの逢瀬の最中、健は肩拾いをする父親の姿をみつけ、そんな父親の惨めな姿を恥ずかしく思った健は、帰宅すると父親を激しく殴りつける。

そして訪れるユキとの別れ。突然の父親の死。屑拾いが、健の進学資金を貯金するためだったことを、父親の寝床からみつけた通帳で知った健は、殴られても決して抵抗することのなかった父親を思う。大事なものを失った健に、校長は「サンタクローズは、必ず、いるよ」と声をかける。「サンタクローズの姿を見た

「とりあえず五万円、貸してもらえない？」

初対面の男、しかも自分の恋人の夫にこう言われたら、いったいどう反応したらいいのだろうか？ 猿渡由美子「ミスター・ヒビキ」〔じゅん文学〕名古屋は、語り手である坂井田風太がユニークな登場人物た